

巡礼研究の4つの論点—巡礼現象の現代性と古典的巡礼の理解の断層から

浅川 泰宏

埼玉県立大学の浅川と申します。よろしくお願ひします。

私は文化人類学と宗教学を主に専攻しております、その立場から四国遍路を中心に研究を行っています。昨日までの発表を伺いまして、1)「歴史」の二面性—史実と伝説、2)「巡礼」概念の問い直し、3) authenticityのポリティクス、4) 巡礼の市場性—特に交通の4点をディスカッションのテーマとしてお話ししたいと思います。

まず一つ目は、リーダー先生が昨日の講演で、四国遍路「歴史」の二面性についてご指摘されていたことです。私なりに理解しますと、要するに史実と伝説とです。昨日の発表では、伝説が史実にものごく影響を与えるというコメントをいただけたかと思ひます。その通りだと思ひます。例えば四国遍路で思い出すのは、衛門三郎と四国遍路の開基伝説です。衛門三郎という欲深い者がいて弘法大師の鉢をたたきわったという伝説ですけども、これが実際の像として造形されて、そこが聖地（杖杉庵）となり人々が参拝する（スライド①）。リーダー先生はご著書の中でこういったことを、emotional landscapeと説明されていました。要するに空間に人々がイメージネーションを働かせて作ったイメージを具体的に書き込んで、またそれを見る人がそこから物語を読み取って、自分の巡礼の物語を構築していくという構造ですが、まさにそういった意味では人々のイメージネーション、伝説を作る力というのが実際に巡礼にあって、そして史実として歴史を作ってしまう。そういった側面がやはりあるのではないかと感じました。



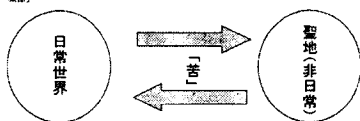
杖杉庵の衛門三郎像
衛門三郎物語と杖杉庵(2003年浅川撮影)

この話を大きくしますと、プレスター=ジョンの王国というのが昔、伝説としてあったそうです。これは何かといひますと、中世にヨーロッパがイスラムと戦っていた時に困っていました。

(昨日の報告で) サンチャゴの話ができましたが、西側では何とか勝ったんですが、東側ではついに聖地を奪還することができなかつた。そうしたところ、アフリカにプレスター=ジョンというキリスト教の強大な王国があって、そこと挟み撃ちすることによって、イスラムをなんとかかしたいと、そういうふう考えた人たちがいました。そしてそのプレスター=ジョンに会うべく、密使を送って何とか探したのですが、実際はなかつた。しかしそれが大航海時代という歴史の大きな流れに繋がっていったと、そういった説があったと思ひます。要するにイメージネーションというものが実際に歴史を作りえるということが、例えば巡礼でいひますと四国遍路では衛門三郎伝説に見られるようなことがありますし、関先生のサンティアゴが中世のディズニールランドとして作られていったということに近いのではないかと、そういった感じがしました。これがまず一点です。

二番目はけっこう大きな問題なのですが、全体で議論するにはこういった話が重要なと思ひます。「巡礼」概念の問い直しですね。昨日のレクチャーでも再々お話しされていましたが、巡礼学における古典的な巡礼理解、それをリーダー先生の講演では四国遍路のフィールドワークから批判的に捉え直したというお話でした。この古典的理解とは端的には次のようなものです。日本で最も有名な巡礼の定義ですが、ピクチャー・ターナーという人類学者がいて、その愛弟子に星野英紀先生がいらっしゃいます。で、その星野先生がつくった巡礼とは何かという定義がこちらですね（スライド②）。読み上げますと、「巡礼とは、日常空間と時間から一時脱却し、非日常時間、空間に滞在し、神聖性に近接し、再び日常時空に復帰する行動で、その過程にはしばしば苦行性を伴う」。

巡礼とは、日常空間と時間から一時脱却し、非日常時間、空間に滞在し、神聖性に近接し、再び日常時空に復帰する行動で、その過程にはしばしば苦行性を伴う【星野 2001『列国遍路の宗教学的研究』正



巡礼の定義

から一時脱却し、非日常時間、空間に滞在し、神聖に近接し、再び日常時空に復帰する行動で、その過程にはしばしば苦行性を伴う」。最後のしばしば苦行性を伴うというところは星野先生のオリジナルだと思います。図にするとこういった形になるわけです。

要するに日常世界といったものがあって、そこから聖地すなわち非日常に出かけて行って、再び日常に戻ってくるという、この往還の図がこれまでの巡礼概念にはありました。これが端的に言えばターナーですし、もっと言えば民俗学者のファン=ヘネップですね。そこからきています。これはどうしてかといひますと、ターナーもファン=ヘネップも儀礼研究者だったんです。そもそも儀礼研究の中からターナーがそういった事例をどんどん見つけてきて、要するに日常

を一変させるような劇的な瞬間が訪れることを考えまして、それが一番的確に現れる例が巡礼だということに気付き、そこから巡礼研究に乗り出していったという経緯があります。私がターナーの巡礼理解の中で重要だと思っているのが、マルコムXのメッカ巡礼です。アメリカ人で、イスラム系で60年代の差別運動と戦っていたマルコムXがアメリカを離れてメッカに行ったところ、そこで目の当たりにしたのが、要するに神の前の人間の絶対的な平等だったということで、いたく感激し、新しい人間観を携えてアメリカに帰っていったという話だったんですが、それがまさにターナーが捉えた端的な巡礼世界なのではないかと思います。すなわちここで言いたかったのは、主に文化人類学は儀礼論的立場から巡礼といった概念を立ち上げていったということです。それに対してリーダー先生はどちらかと言いますと宗教学ですので、宗教学の観点を入れたのではないかということです。つまり入信あるいはキリスト教の回心といった概念ですが、要するにそっちに行っちゃって帰って来ないというそういうタイプですね。「巡礼教」に入ったみたいなそういうニュアンス、そういった宗教学の回心、入信といった概念を入れたところ、巡礼概念がもう少し膨らむのではないかということをおっしゃっていたのではないかと思います。そしてそこで指摘されたのが、イデオロギカルな巡礼理解が、一時的な（テンポラルな）現象に囚われているということでした。四国遍路でいいますと、リピーターになっていたり、あるいは現地に住みついてしまったりだとかという形で巡礼が人生そのものになる。a way of lifeとおっしゃっていましたね。四国遍路だけではなくて、例えばルルドの研究の寺戸淳子先生も同じようなことを言っています。ルルドにはウイルスがいて、それに取り付かれると毎年のように来るようになるんだと、そういった物語があるとおっしゃっていました。したがってこれまでイデオロギカルに考えられてきた巡礼概念に対して、宗教学概念の視点を加えることで、その人生そのものになるのが巡礼の在り方だということが発見できたのではないかというのが、一つあるのではないかと思います。

もう一つ、今のがどちらかと言えば時間に関することだとしますと、今度は空間に関することです。巡礼は日常を離れた遠くの聖地に行くというのが伝統的な概念としてあります。それについては、リーダー先生は（江戸・東京に近い）秩父の例と、四国の人間が四国に行くという話をあげて、近くの聖地も巡礼の対象になるのではないかと、必ずしも遠くの聖地に行く人はばかりではないだろうという、見解を示されていたと思います。ただそれに関しては、私はちょっと異論があります。四国の方が四国遍路をするときに好んで使う言葉で、「お四国」に行くという概念があります。要するに地理的な空間としての四国と、宗教的な空間としての四国は違うものであって、四国の人間であっても自分の日常空間を離れた「お四国」という他界に行くのだと、そういう感覚が現れていると思います。日常を離れるというのは単なる地理学的な距離感の問題ではなくて、観念としての異界に行くという、精神レベルでの距離感が重要なかもしれません。以上が二点目の「巡礼」概念の問い直しの観点について、気がついたことです。

三番目です。authenticityのポリティクスについてですが、これは要するに本物の巡礼とは何かという話です。誤解が無いように言っておきたいのですが、authenticity本物性は、従来どちらかという何が本物かという、本物を規定するような言葉として使われてきたかもしれませんが、私はそれは無意味だと思います。例えばバスと歩きはどちらが本物かと、こういった問いは無意味です。しかしながら現にどちらが本物か、自分たちが正しいというそれぞれの主張の対立はあるわけです。authenticityという概念を構築主義的に捉えなおしますと、要するにそれが人々の主張によって作り上げられるというか、それぞれの遍路、巡礼者が何を大切にしているのか、何によって自分が巡礼者、遍路であるかということをおっしゃっているのか、そこを知るために有効ではないのかと思います。繰り返しますと、どちらが本物かという本質論ではなくて、その巡礼体験の根拠は一体何なのか、それを知るには有効ではないのかと思うのです。バスの遍路は札所で祈ることを重視する。正しく祈る、正しいお作法で祈る、正しい服装でやる、そして自分たちはその札所で費やす時間が長いということでした。しかし、徒歩の遍路は道を歩くことを重視する。極論すると、札所に仮に5分しかいなかったとしても、道を自分の足でしっかりと歩くことのほうが大切だという主張が多いようです。これは飛躍かもしれませんが、札所よりも道に価値を見出すことは、新しい宗教性、聖性の現れではないかと思うのです。

また歩き遍路が主張する「正しさ」の根拠に接待があるという点も面白いと思います。歩いていますとときどき接待してくれる方に出会います。その時に「えらいね」だとか「大変だね」などの言葉をかけてもらえることが少なくありません。これがとても重要な意味を持つと言いますか、要するに、自分たちがやっている行為というのは間違っていない、他の人も認めてくれると、そういう思いに繋がっていきまして、それが自分探し系の巡礼者なんかには心の支えになる。接待という回路を通した第三者の応援が、歩き遍路が「正しさ」を主張する根拠になっている。そういった点がおもしろいと点だと思っております。これが三点目ですね。

最後です。これはあまりこれまでも議論されてない点かなと思います。巡礼の市場性、特に土産も魅力的

